

羽豆神社所蔵紺紙金字法華経および心経・阿弥陀経について

荒巻史枝

はじめに

愛知県知多半島、羽豆岬突端に位置する羽豆神社には、紺紙金字法華経八巻と心経・阿弥陀経一卷（以下、本経とする）が伝わり、愛知県の有形文化財に指定されている。このうち法華経巻第一の巻頭には見返絵が附され、宋由来の説法図と、二十八品から採取された説相図のそれぞれのモチーフが描かれている（図1、2）。

本経と同様の見返しを持つ作品としては他に、クリーブランド美術館とニューヨーク・パブリックライブラリーのスペンサー・コレクションが所蔵する「紺紙金字法華経巻第一」（以下、クリーブランド本、スペンサー本）がある。この二巻については、鎌倉あるいは南北朝の制作とされている⁽¹⁾。

一方、本経には一色道範の施入銘があり、応永十五年（一四〇八）頃の制作と判明する。これらはどのような相関関係にあるのか。本経は、郷土史誌類⁽²⁾に紹介される程度で、詳細な論考はこれまでなされていない。今回幸いにも調査の機会を得たので、美術史的位置付け

を含めた検討を加えたい。

一、現状

本経全九巻は卷子装で、輪宝の蒔絵をあしらった黒漆塗の内箱に納められている。外箱は明治二十一年に作られたものである。軸首は八角水晶で、上下とも欠失している巻が多い。紐は、巻第一のみ後補の交織組紐がついているが、他の巻には紫色の平打組紐の痕跡が残る。

金泥塗の表紙には、紺紙に金字で「妙法蓮華経巻第



図1 卷子装

□」（巻第一（第八）、「心阿弥陀経」と書かれた題箋が貼られている。巻第一を開くと、見返しに赤味を帯びた金泥で描かれた、精緻で見事な経意絵（図2）が目飛び込んでくる。一紙半の横長の大画面に八卷分の経意絵が集約されており、見返絵が描かれるのはこの巻第一のみである。この見返しの詳細については後述する。法量については別表1、2に示した。

全巻を通して、一・九センチ幅の銀界線に、金泥で経文が書かれている。紙幅は四六・六センチ前後のものが最も多く、一紙につき二四行、一行に十七字が配される。

表紙に継がれた本紙は、二行分を空けて主題から始まる。この点はクリーブランド本、スペンサー本とも共通している³⁾。

経文の字は全体的に謹直で、特に巻第一は室町時代の制作とは一見して判断がつきにくいほどの古様な筆致で、能筆の者の手による。巻第五や六などは些か癖のある字が見受けられ、複数人で分担されたことが判る。

本紙には大きな虫損や破損などは無く、金銀泥は輝きを保ち、保存状態は良好である。

二、伝来

本経の伝わる羽豆神社は、白鳳時代の創建とされている。『南知多師崎誌』によると、地形をあらわす「張出」から「羽豆」になったとも、祭神である建稲種命の尊称「ハタガシラ」から「幡頭」の語が用

いられたとも言われている⁴⁾。元亨年間に熱田大宮司摂津守親昌がこの地に築城し、現在境内は城址となっている。当社には数々の宝物が伝世されており、写経では本経以外に、嘉暦二年（一三二七）書写の折本大般若経六百巻も存する。宮司は代々間瀬家が務め、現当主が本経を管理されている。

本経の制作年代は、巻第一の見返しの次に継がれた、一色道範による施入願文（図3）によって判明する。

奉施入 尾張國幡頭崎大明神御宝前

紺紙金泥妙法蓮華經一部八卷并心阿弥陀経各一卷

右意趣者奉為 天長地久國土豊饒殊武運長久

子孫繁栄息災安穩寿命長遠隨順 上意

飽足捧縁心中 所願二世悉地一々圓滿仍

所奉施入如件

一色

從五位上修理大夫源朝臣

應永十五年戊子卯月 日沙弥道範（花押）

道範が応永十五年（一四〇八）に自らの武運長久と子孫繁栄を願ひ奉納したことがわかる。

一色氏は室町幕府四職家の一つである。足利泰氏の子公深こうしんが三河國幡豆郡吉良莊一色郷に地頭として住し、一色氏を名乗った。道範は、貞治五年（一三六六）、詮範の長男として生まれた。明徳三年（一三九二）



図2 卷第一 見返絵全図

	卷第一	卷第二	卷第三	卷第四	卷第五	卷第六	卷第七	卷第八	心阿弥 陀經
天地	27.6	27.7	27.8	27.7	27.7	27.6	27.7	27.7	27.6
界高	21.1	21.4	21.4	21.2	21.4	21.2	21.3	21.1	21.4
界幅	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9	1.9
見返し幅	71.7	21.6	21.8	21.6	21.6	21.7	21.7	21.6	21.6
第1紙幅	22.6	46.4	46.5	46.3	46.5	46.5	46.2	44.5	44.7
第2紙幅	5.4	46.6	46.7	46.6	46.7	46.6	46.5	46.2	37.3
第3紙幅	46.7	46.7	46.8	46.6	46.8	46.7	46.5	46.6	40.7
第4紙幅	21.5	46.7	46.7	46.7	46.7	46.8	46.6	46.6	36.7
第5紙幅	3.6	46.6	46.7	46.4	46.5	46.6	46.5	46.4	44.4
第6紙幅	23.4	46.6	46.7	42.8	40.2	46.7	37.0	46.5	42.8
第7紙幅	46.7	46.6	46.6	42.7	46.7	46.3	44.3	46.4	29.0
第8紙幅	46.7	46.5	46.6	42.4	46.5	46.5	46.4	46.3	23.5
第9紙幅	46.6	46.6	46.6	46.2	46.6	46.6	46.5	46.0	
第10紙幅	46.8	46.6	46.7	46.2	46.5	46.6	46.5	43.0	
第11紙幅	46.8	46.7	46.6	46.3	46.6	46.4	46.6	42.1	
第12紙幅	46.7	46.5	46.6	46.6	46.6	46.4	46.4	40.6	
第13紙幅	46.5	46.5	46.6	46.5	46.6	46.4	42.5	46.4	
第14紙幅	46.6	46.7	46.6	46.4	46.6	46.6	46.3	37.0	
第15紙幅	46.1	46.5	46.6	44.5	46.7	46.6	46.4	46.5	
第16紙幅	46.7	46.5	44.5	46.3	46.6	46.5	11.4	46.4	
第17紙幅	46.7	46.5	46.5	46.6	46.6	46.4	34.6	46.5	
第18紙幅	46.7	46.6	46.5	46.5	46.6	46.4	44.3	46.2	
第19紙幅	44.7	46.7	46.5	46.4	46.5	46.5	36.7	9.7	
第20紙幅	46.4	45.9	46.5	46.4	42.6	46.5	38.5	14.0	
第21紙幅	19.0	46.5	44.7	36.5	46.5	46.5	19.4		
第22紙幅	14.4	46.5	46.2	7.4	31.0	29.1	21.5		
第23紙幅		46.5	44.3	14.5	40.9	8.4	27.1		
第24紙幅		46.3	25.0		9.2		15.1		
第25紙幅		44.3	33.0				17.5		
第26紙幅		9.5							
全長	879.0	1192.2	1145.1	995.4	1070.9	1036.3	969.0	855.5	320.7

表1 羽豆神社本分量

単位：cm

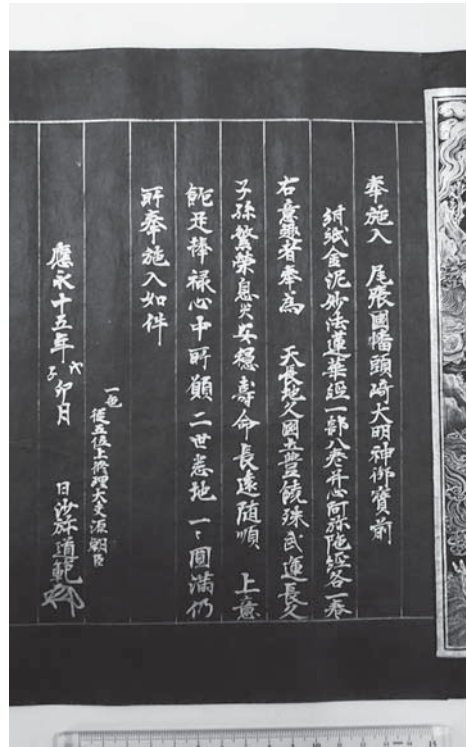
	羽豆神社本	クリーブランド本	スペンサー本
制作地	日本	日本	日本
制作世紀	15	13	13
本紙紙高	27.6	27.7	27.6
見返し画面高さ	24.2	24.4	23.4
見返し画面長さ	69.6 (45.2 + 26.5)	78.5 (51.0 + 29.5)	77.1 (52.7 + 26.6)
見返し縦横比	2.96	3.21	3.29
見返し天 余白	1.7	1.7	2.1
見返し地 余白	1.7	1.6	2.0
界高	21.1	21.7	20.5
界幅 (5行)	9.75	10.3	9.5
天界	3.0	2.6	3.3
地界	3.4	3.3	3.7
紙長最少	3.6	50.7	52.1
紙長最大	46.8	51.6	52.8

表2 羽豆神社本クリーブランド本スペンサー本分量比較表

単位：cm

須藤氏論文(注3)より転載

図3 巻第一 願文



に丹後、伊勢の守護となり、応永十三年（一四〇六）から若狭、尾張知多、若狭今富領主となった⁶⁾。「道範」の名は、もとは「満範」であったが応永八年（一四〇一）に剃髪して以降称した法名である（本稿では便宜上「道範」と統一する）。

本経を施入した応永十五年の末には、小笠原明鎮の弟安芸守長正ら一族が三河に叛し、道範がこれを幡豆郡に討っている。その翌月、応永十六年正月に道範は四十二歳で亡くなった。小浜の長泉寺、知多の慈光寺、丹後の慈光寺にその位牌がある。

道範は生前、本経の他に、以下の三部の法華経を奉納したことが、田中塊堂氏の「一色道範とその納経」⁶⁾の中で指摘されている。

○比叡山

羽豆神社所蔵紺紙金字法華経および心経・阿弥陀経について

同氏は叡山本について「いまこゝに完存せる一部を一商鋪に見る…」としているが、現在の所蔵は不明である。願文⁷⁾から応永九年（一四〇二）に叡山僧が書写したことは読み取れるが、どこに奉納されたのかは明らかにしていない。

氏の詳細な記述⁸⁾によると、箱と表紙の図様は羽豆神社本とは異なる様相を呈しているが、見返しや本文の体裁は、ほぼ同様と言っていだらう。

○住吉社

早稲田大学の荻野研究室収集文書の中に、「一色満範紺紙金泥経施入識語」として願文部分のみ切り取られたものが、新しく卷子装に装訂され、所蔵されている。願文⁹⁾によると、応永十二年（一四〇四）九月に奉納された。

断簡なので全体像は判然としないが、応永九年と十五年奉納のものに見返し絵が付されていたとすると、同十一年に奉納された本経にも附されていたと考えるのが妥当であろう。願文のほかが散逸しているのが残念である。

○熱田社

田中氏によると、現在の熱田神宮には道範奉納の法華経はなく、寛政三年四月の大宮司千秋家の神宝目録（写本）の中にその記述があったという。

- 一、法華経一部 應永十五年戊子卯月
 - 一色従五位修理大夫源朝臣沙弥道範
- 不動院文書中の紺紙金泥妙法蓮華経がこれにあたり、巻第八の巻末

に熱田社に施入した旨の願文がある。それによると、本経の願文とは
ほ同文¹⁰で、施入日は「卯月二日」とある。巻第一の所在は不明の
ため、見返しを確認する術は無いが、本経と奉納日が近いことから、
おおよそ同じような装訂が施されていたと推察される。

羽豆神社本に話を戻すと、施入文があるのは巻第一のみで、巻末は
経文のあとに尾題で終わる。ところが、巻第二以降は、奥書が切り取
られ、尾題の後に「應永十五年戊卯月」のみが貼り継がれている。巻
第二から巻第八と心経・阿弥陀経には本来同じ奥書があったが、何ら
かの事情で切り取られたもので、それらは経箱の中に納められて（図
4）おり、巻第一のそれと全く同じ文言であった。巻第一も尾題のあ
とに一行空けて紙継が見られる。おそらくもともとは巻末の尾題のあ
とに施入文があったのだが、何らかの理由で切り離され、巻首の見返
しの後に継ぎ直されたようである。

さらに、「紺紙金泥法花経入注文」と墨書された一紙の文書も付属
されている。内容は次の通りである。

奉施入幡頭崎大明神御経入注文

紺紙金泥法花経一部八巻并心阿弥陀経一卷

己上九巻

御料紙紺紙

御字金泥

御軸水精

御紐紫組

図4 本紙巻末より切り取られた願文



御箱蒔絵 御紋輪宝

御くりかた なんりやう

輪宝

御打敷 赤地綿

以上 一色

從五位上修理大夫源朝臣

應永十五年戊子卯月廿五日 沙弥道範(花押)

すなわち、施入した日付は四月二十五日であり、打敷は見当たらないが、それ以外はほぼ原装を今に伝えるものであることがうかがえる。

施入文に「幡頭崎大明神」とあるように、道範がその神前に奉り、以後約六百年間、移動することなくこの地に伝来している。

三、見返絵の図様

(一) 画題

前述したように、巻第一には見返絵が附されており、八巻分の経意絵が描かれている。画面枠は三ミリ幅の子持ち罫で、横六九・六センチ、縦二四・二センチ、経文の界線より三センチほど高さがある。その中に描かれるモチーフを見ていく。

画面を大きく二分すると、右側は釈迦の説法図、左側は法華経の説相図に分けられる(図2)。この構図は、平安時代以降の日本作の見返絵によく見られる正面向きの釈迦説法図とは異なり、栗棘庵所蔵の

南宋版法華経の見返し絵(図5)に代表されるような精緻な露台に斜め向きの説法図を踏襲している。但し、本経の釈迦の背後に描かれる鷲の頭の形をした靈鷲山は、日本作でのみ見受けられるモチーフであり、中国の見返絵では管見の限り見出せない。

釈迦の肌は金泥で塗られ、唇には朱が点じてある。

釈迦の坐す須弥壇は大きな露台の上にあいずれも頭光のある四菩薩、四天王、

二僧が圍繞する。須弥壇に向かつて四人の僧が座り、その後ろに頭光のある七人と、頭光のない二人が座る。

この圍繞衆と聴聞衆は比較的丁寧な描かれ、例えば露台の聴聞衆の顔や衣装などは、一人ひとり描き分けようという意図が感じられる(図6)。

左側の説相図に描かれる法華経の画題は、表3に一覧化した。まず法華経巻第一序品に説かれる「六趣衆

南宋版法華経の見返し絵(図5)に代表されるような精緻な露台に斜め向きの説法図を踏襲している。但し、本経の釈迦の背後に描かれる鷲の頭の形をした靈鷲山は、日本作でのみ見受けられるモチーフであり、中国の見返絵では管見の限り見出せない。

法華経の画題は、表3に一覧化した。まず法華経巻第一序品に説かれる「六趣衆

図5 栗棘庵所蔵南宋版法華経 巻第一

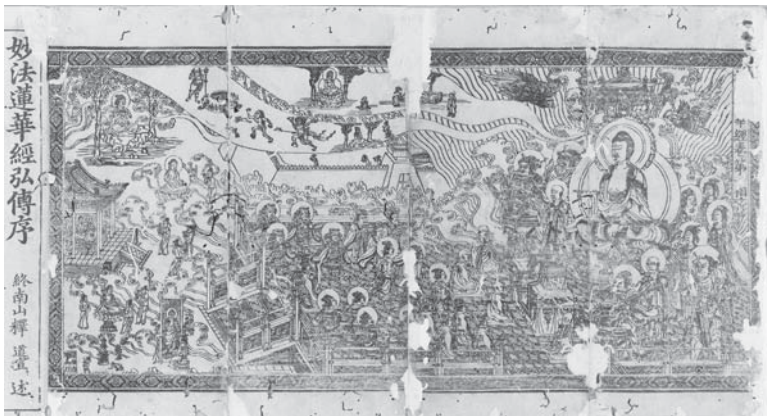


図6 圍繞衆と聴聞衆



生」が釈迦の白毫光中に描かれる (H①)。その左下に、方便品に説く仏道を成ずるところの造仏像、造仏画、さらに童子が塔を作り礼拝する場面が描かれる (H②)。巻第二からは譬喩品にある「三車火宅」(H③)、信解品の「長者窮子」(H④)、巻第三からは龍が雨を降らす

「三草二木」(H⑤)、授記品にある「大王饗膳」(H⑥)、化城喩品の梵天勧請における三宮殿 (H⑦) と「化城宝处」(H⑧) の場面が描かれる。巻第四は法師品「五種法師」(H⑨)、「高原穿鑿」(H⑩)、見宝塔品の六角形の多宝塔 (H⑪)、巻五からは提婆達多品における海中湧出の文殊菩薩 (H⑫)、同品の竜女成仏の場面 (H⑬)。巻第六からは分別功德品の僧坊造立の場面 (H⑭)、随喜功德品の高座説教 (H⑮) の場面。巻第七からは常不軽菩薩品 (H⑯)、嘱累品の摩頂付嘱 (H⑰) の場面。巻第八からは観世音菩薩普門品の偈中の住人の十二の難のうち、大水難、須弥堕難、枷鎖難の場面 (H⑱)、普賢菩薩勧発品の普賢影向 (H⑲) の画題が採られている。

これらの画題は、先に挙げた栗棘庵本のような、七巻本の宋版法華経にも採用されており、H⑨の横に並んだ僧やH⑩の高原穿鑿の場面のみが宋版ではあまりみられない画題である。

(二) スペンスー本およびクリーブランド本との比較

本経と、クリーブランド本、スペンスー本とは、説相図の画題そのものが一致し、説法図を含め全体の図様やその配置も似通っている。鎌倉時代の制作ともされる両本と本経にはどのような相違点があるのか、表3のC①～C⑱、S①～S⑱の各画題ごとに比較してみる。両本の金泥の筆法や表現に関しては、須藤氏の詳細な論考¹⁾があるので、ここでは羽豆神社本との図様の比較に絞って述べる。

①白毫光中の六趣の衆生は、三本とも酷似して描かれる。畜生道の馬は金泥が塗られ、牛には塗られていないという点においても同様であ

る。ただし、スペインサー本の釈迦の光背が若干簡略的に描かれている。

② 仏像を造る場面が、クリーブランド本のみ刀の持ち方が違ったり、仏画の背景がスペインサー本のみ塗られていなかったりと、相違がある。

仏塔を礼拝する場面は、童子と仏塔の配置がそれぞれ異なっているが、童子や仏塔の形そのものは共通している。

③ まず、邸宅の外にある三車は、羽豆神社本は上から牛・羊・鹿、クリーブランド本は牛・鹿・羊、スペインサー本は羊・鹿・牛と配置が異なっている。また、羽豆本とクリーブランド本は牛車が一番大きく描き分けられるが、スペインサー本は装飾は各車異なるものの、大きさは同じである。邸宅内の庭に描かれる魑魅魍魎は、配置は異なっているが、単体の形は似通っている。邸宅、門、回廊などの建造物はそれぞれ、相違点がある。スペインサー本の回廊には脚が描かれる。

④ 窮子が橋を渡り長者の使者に見える場面であるが、羽豆神社本とクリーブランド本は、岩の隙間から出てきているようであるが、スペインサー本では粗末な小屋が描かれている。長者に財宝を与えられる場面になると、三本とも酷似した図様になっている。窮子の手前にある木の生えた山容は、羽豆神社本とクリーブランド本では同一のものが描かれる。

⑤ 雷雲に乗った龍が雨を降らす図様である。雲の下にある二本の樹木の左方は羽豆神社本とクリーブランド本は腰をひねったような同じ形をし、右側の樹木はクリーブランド本とスペインサー本が同一の形をしている。龍はすべて似ているが、雲の描き方がクリーブランド本はより丁寧である。

⑥ 大王の従者が羽豆神社本は一人であるのに対し、他二本は三人である。一方、食事を与えられる男は、スペインサー本のみ三人で、他二本は二人である。大王の天蓋傘は、スペインサー本が装飾的に描かれる。

⑦ 三つの宮殿は、向きも配置も含め、ほぼ同様だが、スペインサー本が他二本に比べ簡略化されている。また、宮殿の下の雲気はクリーブランド本がより精緻に描かれる。

⑧ クリーブランド本のみ化城の門が開いている。他二本は同図様である。羽豆神社本では城内に、クリーブランド本では扉の外に樹木が描かれる。これは⑤の三草二木の喩で雨が樹木を潤す場面を含んでいるのだろう。

⑨ スペインサー本では、僧は経を誦誦・暗誦・書写する三人を描くが、羽豆神社本とクリーブランド本では受持する僧が一人増える。また、クリーブランド本は僧房の屋根は描かれない。

⑩ 高原穿鑿の場面であるが、井戸を掘る二人の男は三本ともほぼ同じ格好といていいだろう。背景に関しては異なっており、羽豆神社本は樹木や山容を描き、クリーブランド本は細かい雲気を描く。全体的にもそうした表現が多い。

⑪ 六角形の多宝塔はすべて同様の図様だが、手前の礼拝する菩薩の配置が異なる。羽豆神社本のみ一直線だが、菩薩の衣はクリーブランド本と同じような描き分けがされている。

⑫ 文殊菩薩の光背の描き方などそれぞれ異なる。すべて肌身は金泥が塗られ、いささかスペインサー本が衣の面積が広い分簡略的か。波濤文様や雲気などはクリーブランド本が細かい。

⑬それぞれで僧の人数が異なる。またスペンサー本のみ釈迦が二重光背になるなど、少しずつ異なるが、龍女の姿に関しては酷似する。

⑭僧房の壁や柱は各々異なっている。屋根に関しては、クリーブランド本のみすべて瓦が葺かれていて、他二本は途中といったところだ。

⑮三本とも同図様で、後ろの樹木は羽豆神社本とスペンサー本が似通っている。

⑯スペンサー本のみ迫害者が一人少ないが、二人の格好は他二本と同様である。ここでも羽豆神社本には山が描かれる。

⑰摩頂付囑の場面であるが、スペンサー本のみ菩薩の肌身が塗られていなかったり、釈迦の背後の僧に頭光がなかったりと異なる。しかし、クリーブランド本のみ摩頂を受ける菩薩がこちら側を向いていたりと、各々相違がある。

⑱羽豆神社本とクリーブランド本では観音が岩上に描かれるが、スペンサー本では虚空の円相中に描かれる。また、船の屋台が一際大きかったり、拷問具の後ろで祈る男の格好が異なったりと、スペンサー本だけ特異である。

⑲普賢菩薩の顔の傾きや天衣のたなびき、白象の表情や装身具など細かな違いはあるが、おおよそ同一といっていいたいだろう。

四、考察

前章でクリーブランド本、スペンサー本との詳細な図様の比較を行ったが、三者それぞれに他の二本と似通う表現、異なる表現が見ら

れた。例えば、画題②では羽豆神社本とスペンサー本が共通する図様である一方で、画題④では羽豆神社本とクリーブランド本が共通した図様を持つ。従来、鎌倉時代、十三世紀の作とされてきたにもかかわらず、応永十五年、十五世紀初頭の制作と判明している羽豆神社本と、酷似する図様を持ち合わせていることに疑念が生じる。比較を通して、相互に転写関係に無いことは明白であるが、それぞれの祖本の存在があるとしても、一世紀以上の隔たりがあるのにこう近似した法量（表2）や図様で写経制作ができるものだろうか。

前章（一）でも述べたが、本経は、宋版経の見返絵にあるような斜め向き構図の釈迦説法図に、靈鷲山を描きこむといった日本固有の表現を用いている。このような説法図を持つ法華経見返絵は、東京・竹本泰一氏所蔵の「色紙法華経」にも附されている。七巻に調卷される宋版経とは異なり、八巻本で、紺紙に金泥で描かれた正方形の見返絵（図7）に、色紙墨書の経文部分が継がれている。経文部分は十一世紀頃の制作とされ¹²、後世になって見返しが附けられた。巻第一の見返しは、通常宋版の見返絵の右側に描かれる説法図のみが、画面を占めている。この靈鷲山の形もそうであるが、釈迦の上の天蓋の形は、三本のそれと酷似している。竹本氏本の巻第二で描かれる、火宅は回廊の形に描かれ（図8）、塀のように描かれた三本より、南宋版に忠実に描かれている。巻第三では、三草二木の農家として描かれている家（図9）が、スペンサー本のS④の窮子のあばら小屋として描かれる家、さらに樹木の形までそっくりなのである。この図様は、先行する南宋版においては、三草二木の場面であり、やはりここでも竹本氏

図7 竹本氏本色紙法華經 卷第一(部分)

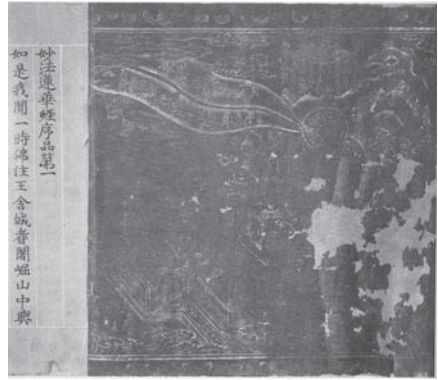


図8 竹本氏本色紙法華經 卷第二(部分)



図9 竹本氏本色紙法華經 卷第三(部分)



本が宋版に忠実と言っていないだろう。







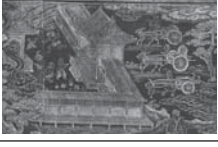



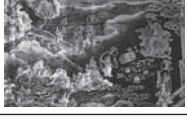



















南宋版に描かれない画題として、⑨の法師品の僧は、竹本氏本は羽豆神社本と同じく四人描かれる⁽¹³⁾。また、貞治四年(一三六五)に刊行された臨川寺版や賢字版のような、宋版経を八卷に再構成した見返絵をもつ版経の存在もある。スペンサー本と羽豆神社本では描かれ、クリーブランド本で描かれなかった⑨の僧坊の屋根が、竹本氏本でも臨川寺版でも描かれていない。

以上のような点をふまえ、七巻本を八巻に調卷したものと、一卷に集約したものとの違いを差し引いても、三本に比べ、竹本氏本の見返絵がより古様で宋版に忠実なことが確認できた。

竹本氏本の天地の余白に描かれた蓮華草と蓮弁の装飾文様は、須藤氏によると「十四世紀以降の日本での制作を物語っている」という⁽¹⁴⁾。また、梶谷亮治氏も「この系統の見返絵をとまなう版経は南北朝以降いくらか流布したことが確かめられるが、これと本経巻の見返絵とは構図、内容ともにきわめて近い」「本見返絵が描かれたのは、臨川寺版の成立をさほど離れるものではなからう」としている⁽¹⁵⁾。

大陸より将来された南宋版の法華経見返絵は、そのまま写されるのではなく、八巻に構成したり、図様を取捨選択したりといった和様化の過程を経、まず早い段階で、奈良国立博物館などに分蔵されている「紺紙金字一字宝塔法華経」⁽¹⁶⁾いわゆる心西願経が長寛元年(一一六三)に制作された。心西願経には正方形の見返しに南宋版の左半分に説相図が描かれるが、その頃の日本の装飾経は、正方形の見返しに、霊鷲山を背にした正面向きの釈迦説法図が描かれているものが多く、同時

表3

		ニューヨーク パブリック ライブラリー (S)	羽豆神社 (H)	クリーブランド 美術館 (C)
①	巻第一 序品第一			
②	巻第一 方便品第二			
③	巻第二 譬喩品第三			
④	巻第二 信解品第四			
⑤	巻第三 薬草喩品第五			
⑥	巻第三 授記品第六			
⑦	巻第三 化城喩品第七			
⑧	巻第三 化城喩品第七			
⑨	巻第四 法師品第十			
⑩	巻第四 法師品第十			

		ニューヨーク・ パブリック ライブラリー (S)	羽豆神社 (H)	クリーブランド 美術館 (C)
⑪	見宝塔品第十一 巻第四			
⑫	提婆達多品第十二 巻第五			
⑬	提婆達多品第十二 巻第五			
⑭	分別功德品第十七 巻第六			
⑮	随喜功德品第十八 巻第六			
⑯	常不軽菩薩品第二十 巻第七			
⑰	囑累品第二十二 巻第七			
⑱	観世音菩薩普門品 第二十五 巻第八			
⑲	普賢菩薩勸発品 第二十八 巻第八			

代日本作の法華経見返絵で心西願経の類似作例は見られない。それから約二世紀のち貞治四年（一三六五）に、南宋版の趣きをそのままに、八巻本の臨川寺版などが刊行された。版経と写経の違いはあるものの臨川寺版と竹本氏本の見返絵の図様は非常に近いものがあり、執筆者も梶谷氏の説に同意し、竹本氏本は十四世紀半ば以降に制作されたと考える。この頃までに、見返絵を持つ宋元版法華経が多く刊行され、また高麗でも紺紙に金泥で描かれた精緻な見返絵のある法華経が制作され、日本に将来されている。そういった流れの中で竹本氏本のような見返絵が生まれたとみるのはごく自然であり、それを一図に纏める動きが出てきても不思議ではない。本経やクリーブランド本、スペンサー本の祖本ともいうべきものは、十四世紀中に成立したのではないか。

諸先学によるとクリーブランド本は「宋代」「十三世紀後半」、スペンサー本は「鎌倉中期」「十三世紀後半」「十四世紀」と、制作年代を様々に推測されてきた。たしかにクリーブランド本は三本の中でも最も精緻に描かれ、古様な図様もある。だが、クリーブランド本やスペンサー本と、竹本氏本や羽豆神社本の間に、一世紀以上の隔たりがあるとは明言しがたい。

制作時期としては、クリーブランド本が十四世紀後半、応永十五年（一四〇八）奉納の羽豆神社本がそれに次ぎ、そしてスペンサー本は十五世紀前半以降に制作されたのではないかと考える。

おわりに

南宋版七巻本の法華経見返絵を、日本において八巻に改変し、さらに説法図と取捨選択した説相図をうまく配置し、一図に仕立てたという特異な例の見返絵について、現存作例三本を比較検討することで、これまでわからなかったクリーブランド本とスペンサー本の制作時期が類推できた。

本経は、一色道範という篤信の一守護大名が制作者となった見返絵をもつ法華経で、且つ制作の意図と時期が判明する点、さらにその九巻が完存しているという点でも、非常に貴重な作例である。応永十五年という室町中期において、これだけ優れた見返絵を描いた高度な技術を持つ経師の存在が示されることは、美術史的にも大変意義深い。経師の工房の問題にもあたらねばなるまいが、それを考える上で、応永八年に仏道に入った道範が、翌九年に奉納した法華経は、叡山僧に書写させたものであることは看過できない。本経の巻第一に見られるような、見事な筆致の経文を書く写経僧と、複雑な過程を経て成立した祖本を写し描く絵師をもち併せる写経所は、おそらく叡山にあると推測するが、今後の課題としたい。

本経の存在は、これまで制作年代の判明しなかった、異国に渡った二作例について、少しなりとも制作時期についての示唆を与えたという点においても、大変価値のあるものと考えられる。

注

- (1) スペンサー本に関しては、反町茂雄『スペンサーコレクション蔵 日本絵入本及絵本目録』(弘文社、昭和五十三年六月)に「鎌倉中期写」「上杉家旧蔵」とあり、またサントリー美術館「物語絵 Tales of Japan」(展覧会カタログ、昭和六十二年二月～五月開催)に「南北朝時代(十四世紀)」とある。
- 須藤弘敏「経絵に映る宋と日本」(『國華』第一三七六号、國華社、平成二十二年六月)に、「所蔵するクリーヴランド美術館は一九七〇年に購入して以来、宋時代の写経としている」とあり、須藤氏は両本について「十三世紀後半」とする。
- (2) 『日本の写経』(京都書院、昭和六十二年)、『愛知県の文化財』(文化庁・愛知県教育委員会、平成七年)、『愛知県史別編文化財2 絵画』(愛知県史編さん委員会、平成二十三年)等
- (3) 二行の空白について、須藤弘敏氏は、「経絵に映る宋と日本」(『國華』第一三七六号、國華社、平成二十二年六月)において「宋版経や高麗経では巻頭に空白行を設ける習慣はなく、逆に日本では一行空けるのが通例である。しかし、唐末五代書写の蘇州瑞光寺塔出土「紺紙金字法華経」は巻頭の二行を空けている。宋の経巻の現存例はすべて版本であるため、銀字写経においてこの二行を空ける形式が継承されていたか否かはわからないが、少なくとも高麗や日本の形式ではなく中国の紺紙経にのみ先例がある」と指摘している。
- (4) 西村傳之助『南知多師崎誌』(誠文社、昭和九年)
- (5) 「若狭守護職次第」(『瑞保己一』『群書類従』第四輯 補任部 訂正3版、続群書類従完成会、昭和五十四年)
- (6) 田中塊堂「一色道範とその納経」(『史迹と美術』第202号、史迹美術同致会、昭和二十五年十二月)
- (7) 「右意趣者為天下泰平國土安穩殊武運長久
子孫繁榮息災延命心中所願皆令満足
所奉施入如件 一色修理大夫入道
應永九年壬午七月七日 沙弥道範
- (8) 前掲(6)に「鍍金透彫の盒形の金属製容器に四巻を並べその上に取外しの便を考へて四字型の入た鍍二線を横たへ、それに一巻宛四巻を抱かせて二段に納めてあり、保存のよいこと」、(「表紙は薄紫の縑紙を金銀砂子を以て三段に区切り、上段には比較的大きな切箔を下段には中切箔を以て埋め中段には斑濃霞を金銀振分に或いは雲形に吹付けた裝飾方法でそれに紺紙金泥書の題簽があつてその下を紫の絹紐が帯をなしてある」、(「軸は八角水晶で見返しはまばゆきほどの金箔押になつてゐる。これが紺紙に接続して金泥の説相図が顕はれる。図面の四圍は手持野を以て劃し、右端に釈迦牟尼が結跏趺坐し阿羅漢衆に圍繞され…」、(この説相図は序品のみにあつて他の巻には画かれてゐない。即ち全巻の経絵をこの一卷に画き取めたのである。本文の紺紙は一紙一尺七寸二分高さ九寸二分のものに高さ六寸九分巾六分三厘の銀野を施し)等とある。
- (9) 「奉施入 住吉大明神御宝前
紺紙金泥妙法蓮華経 一部八巻並
般若心経 阿弥陀経 各一部
右意趣為 天長地久國土安穩殊信心施主
武運長久子孫繁榮息災延命現當二世所願成就
皆令満足所奉施入如件 一色修理大夫入道
- (10) 「奉施入 尾張國熱田大明神御宝前
應永十一年甲申九月 日 沙弥道範(花押)
紺紙金泥妙法蓮華経一部八巻并心阿弥陀経各一卷

右意趣者奉為 天長地久國土豊饒殊武運長久

子孫繁榮息災安穩壽命長遠隨順 上意

飽足捧祿心中所願一々圓滿仍

所奉施入如件

一色從五位上修理大夫源朝臣

應永十五年戊子卯月二日 沙弥道範(花押)

- (11) 須藤弘敏「経絵に映る宋と日本」(「國華」第一三七六号、國華社、平成二十二年六月)
- (12) 奈良国立博物館編『法華経写経と莊嚴』(東京美術、昭和六十三年) 四三四―四三五頁
- (13) 兜木正亨『法華版経の研究』(平楽寺書店、昭和二十九年) 所収の臨川寺版法華経には、五人の僧が刻されていた。
- (14) 前掲(11) 二十二頁
- (15) 前掲(12) に同じ
- (16) 完存はしていないが、もとは八卷に「無量義経」と「觀普賢経」を合わせた十卷本

【図版出典】

- 図1〜4・6 およびH①〜⑯ 羽豆神社所蔵紺紙金字法華経および心経・阿弥陀経(執筆者撮影による)
- 図5 栗棘庵所蔵宋版法華経モノクロ写真(執筆者所蔵)
- 図7〜9 奈良国立博物館編『法華経写経と莊嚴』(東京美術、昭和六十三年) 所収図版
- C①〜⑱ およびS①〜⑱ 須藤弘敏「経絵に映る宋と日本」(「國華」第一三七六号、國華社、平成二十二年六月) 所収図版